

F. Y. エッジワース『数理精神科学』と功利主義

——シジウィック＝バラット論争からの独自展開——

上 宮 智 之

I はじめに

「ボックス・ダイアグラム」という経済理論的業績によって知られるエッジワース (Francis Ysidro Edgeworth, 1845-1926) の『数理精神科学』(*Mathematical Psychics*)¹⁾ は、ケインズ (J. M. Keynes) が評したように、「きわめて風変わりな書物」であり、「詩と術学、科学と芸術、機知と学識との、奇妙ではあるが魅惑的な混合物」であった (Keynes 1933, 258 / 訳 314)。この「きわめて風変わりな書物」を含めた著作全体を通じて、「エッジワースの地位を見計る」ための第 1 の観点としてシュンペーターは、「功利主義」を挙げている (Schumpeter 1954, 830 / 訳 1748)。

この功利主義の側面から『数理精神科学』でのエッジワースの契約における不確定性の存在とその仲裁原理に関する議論を整理し、考察する試みは、Collard (1975)、根岸 (1985)、Creedy (1986)、中野 (1995)、Newman (2003) や松嶋 (2005) らによる研究においてなされてきた。中野 (1995) によれば、エッジワースの議論は「功利主義原理の正当化」のためのものであり、それは「不確定性のもとでの選択の問題として契約論的に功利主義を正当化する方法」と「利他心に基づいて〔功利主義を〕正当化する方法」という 2 つの論法によってなされる (中野 1995, 176)²⁾。このうち、前者の論法を中心に評価しているのがクリーディー (Creedy)、根岸および松嶋であり、他方、後者

を中心としての評価はコラード (Collard) や中野によってなされている。このなかで、たとえば、松嶋はエッジワースの議論を『『私的利益』と『公共的利益』の安易な同一視を廃した功利主義のプロトタイプ』(松嶋 2005, 53) と、中野はさらに踏み込んで「功利主義の人間観を修正し利他心を組み込む…試み」としている (中野 1995, 178)³⁾。これら従来の研究は、確かにエッジワースの功利主義に焦点をあててはいるものの、その考察の範囲が『数理精神科学』第 II 部前半部の「経済的計算法」(Economic Calculus) に限定されてしまうため、あくまで経済理論的・経済学説史的取り扱いの域にとどまっている。したがって、同じく第 II 部後半部の「功利主義的計算法」(Utilitarian Calculus) において展開されたエッジワースの功利主義論を割愛している、という難点をもつことは否めない⁴⁾。

エッジワースによると、『数理精神科学』第 II 部は、「各々が個人効用最大へと向かう快樂の力の均衡体系」をあつかう「経済的計算法」と、「各々および全体が普遍的効用最大へと向かう〔快樂の力の〕均衡体系」を考察する「功利主義的計算法」から構成される (Edgeworth 1881, 15-16)。そして、エッジワースは、第 II 部全体の目的を、「シジウィック氏 (Mr. [Henry] Sidgwick) の快樂主義の区分——行動の原理が一般的に幸福最大化であると定義される『方法』の分類——が徹底されたものではないため」(*ibid.*, 16)、シジウィックの「『倫理的諸方法』(ethical methods) への補足を示す」(*ibid.*,

v) こととしている。

エッジワースが掲げたこの目的は、同書における功利主義についての研究に重大なヒントを提示している。それは、『数理精神科学』における彼の功利主義論の全容を明らかにするためには、2つの「計算法」を一對のものとして取り扱わねばならないということ、また、エッジワースの『数理精神科学』とシジウィックの「倫理学的諸方法」、すなわち『倫理学の諸方法』(*Methods of Ethics*, 1874) (以下、『諸方法』)との間の密接な関連を考察せねばならないということ、である。もっとも、エッジワースとシジウィックの関係は、『数理精神科学』にはじまるものではない。『数理精神科学』出版以前に、エッジワースは、2本の論文と1冊の著書を世に送り出している。『倫理学の新方法と旧方法、あるいは「物理倫理学」と「倫理学の諸方法」』(*New and Old Methods of Ethics or "Physical Ethics" and "Methods of Ethics,"* 1877)と題された彼にとって最初の著書は、「バラット (Alfred Barratt)⁵⁾の『物理倫理学』(*Physical Ethics*, 1869)とシジウィックの『諸方法』を検証しながら、これらの諸方法の比較を試みる」(Edgeworth 1877, 1) ことを目的としていた⁶⁾。そして、エッジワースの『倫理学の新方法と旧方法』出版に前後して、『マインド』(*Mind*)誌上において、この両者は『諸方法』の内容をめぐる、「論争 (Controversy)」(Edgeworth 1877, ii)を繰り広げた。また、エッジワースにとって2本目の論文、「快楽主義的計算法」(*Hedonical Calculus*, 1879)は、のちに「功利主義的計算法」と題を改められ、『数理精神科学』のなかに組み込まれている⁷⁾。このように、シジウィックの『諸方法』、およびシジウィックとバラットとの間の論争は、『数理精神科学』以前からエッジワースにとって重要な位置を占めており、『数理精神科学』がどのように生成されたかという観点からも、これらの関係を精査する必要がある⁸⁾。

本稿は、従来の研究においてまったく注目されてこなかったシジウィックとバラットとの間の論争 (以下、シジウィック=バラット論争) を

契機として、エッジワースの『数理精神科学』が重層的で多面的な知的源泉から生成されたことを論証することを目的とする。そのために、II節において、シジウィック=バラット論争、そして『数理精神科学』執筆以前のエッジワースについて取り扱う。続くIII節においては、エッジワースの『数理精神科学』がいかにしてこのシジウィック=バラット論争と結びついているか、そしてそこから明らかにされる彼の功利主義論とはどのようなものか、を考察する。最後に、IV節においては、以上の内容から得られる結論と今後の課題を提示する。なお、本稿では、ダブリンやオックスフォードで調査したエッジワースの大学在籍記録や書簡などにも触れる。

II シジウィック=バラット論争 とエッジワース

本節においては、まずエッジワースの思想の発端ともいえる「シジウィック=バラット論争」を振り返る。前半において論争そのものを略述し、後半においては『数理精神科学』以前のエッジワースへの影響を論ずる。

1. シジウィックの『諸方法』とバラットの 「利己主義の抑圧」

『諸方法』第6版序文における告白によると、社会全体の善のために自分の幸福を犠牲にすることが正しいことであると理解しなければならないため、「各個人は自分自身の幸福を目指すべきである」という立場と「各個人は人びと一般の幸福を目指すべきである」という立場が同時に両立することに、シジウィックは疑問を感じるようになった (Sidgwick 1906, xvii)。

シジウィックは、『諸方法』において、このような疑問にしたがって、行為の究極目的を、自分自身の最大幸福とする「利己主義」(Egoism)、直感的に判断される義務や徳にしたがうこととする「直観主義」(Intuitionism)、人びと全体の最大幸福とする「功利主義」(Utilitarianism)の3つと考え、これら3つの実践理性をあくまで中立的な立場から検証しようとし

た⁹⁾。さらに彼は、これらの実践理性の相互関係とその衝突による問題点を明確にすることも目的とした (Sidgwick 1877 a, 13)。

大きな枠組みでとらえるならば、シジウィックは、3つの実践理性のうち、直観主義と功利主義との関係、利己主義と功利主義との関係を取り扱った (行安 1992, 116)。前者については、直観は世界全体の幸福を善であると認識させ、善が世界全体をより幸福にするので、直観主義と功利主義との間に対立は認められない。したがって彼は、直観主義が功利主義に矛盾しないだけでなく、むしろ功利主義に合理的な基礎をもたらす、と述べる (Sidgwick 1877 a, 456)。他方、後者の関係については、世界全体の幸福の増進が全員の利益になることを保証する神のような存在を証明できないために、「功利主義的義務とそれにしたがって行動する個人の最大限の幸福とが分かち難く結びついていることを経験的根拠に基づいて満足はいくよう論証することはできない」 (*ibid.*, 463-64)。シジウィックは、「同感」と「宗教」という2つの観点から利己主義と功利主義の一致の可能性を検討したのみで、「完全な統合」にはたどり着かなかった。このように利己主義と功利主義とがそれぞれ独立した原理であることを認めざるを得なかった彼の体系は「実践理性の二元性」と呼ばれる。

序文における中立宣言にもかかわらず、『諸方法』は、その構成からも、直観主義や利己主義を否定し、功利主義を肯定する立場にあると誤解されやすかった¹⁰⁾。シジウィック自身、第2版の序文において初版に対するさまざまな批判を紹介しており、そのなかに次のような一文がある。「また別の批判者は、私の主要な目的が『利己主義の抑圧』であるという憶測に基づいて論文を著した」 (*ibid.*, xi)。著者名こそ明示されていないが、この論文とは、1877年の『マインド』誌に掲載されたバラットの「利己主義の抑圧」(The 'Suppression' of Egoism)を指す¹¹⁾。

この論文において、バラットは、シジウィックが倫理学の「物理的証明」(Physical proof)

を省略し、「内省的証明」(Introspective proof)を反駁しないままに、「直観的証明」(Intuitional proof)のみを取り扱い、その結果として利己主義を「抑圧」している、と批判した (Barratt 1877, 167)。バラットによると、シジウィックの『諸方法』は、客観的な善を直観的に認識する「道德能力」の存在が前提となっており、その「道德能力」を通じて「理性」が命じる諸公理 (axioms) や諸原理 (principles) の分類を行っているにすぎない。これを指して、バラットは「直観的証明」と呼び、『諸方法』と称しているにもかかわらず、シジウィックがこの「直観的証明」という方法のみを取り扱っていることに不満を示した。

バラットは、『物理倫理学』(1869)と題した著作を発表しているように、倫理学への物理科学的方法の導入を提唱した人物であり、シジウィックが前提とした「道德能力」に客観性が欠如していることを問題視した。客観性が「道德能力」をともなっていないならば、このとき、直観的に認識されるそれぞれの人間にとっての義務は、「自分が自分の義務と考えるもの」 (*ibid.*, 169)であり、主観的なものにすぎない。このため、道德能力が示す義務が正当なものであるか確認するためには客観的な善が必要であり、バラットはその重要性を音響学にたとえた。すなわち、「聴覚のみからわれわれはいかにして音があらゆる人間にとって同じ意味合いをもつ、つまり同じ関係にあることを理解できるのか」 (*ibid.*, 169)と。音響学の場合、空気の振動という物理的な基準によって、同じ状況のもとにおいて同じ音であるか否かは判別可能である。バラットは、音響学における空気の振動が果たす役割を、倫理学においては「快樂」という客観的な善がなう、と述べる。彼は『物理倫理学』において、感覚組織を保護する物理的な刺激は快樂、逆にこれを損傷させる物理的な刺激は苦痛 (負の快樂) というように分類できると主張している (Barratt 1869, 290)。「快樂」という刺激が物理的な側面から観察可能であり、そこに客観的な基準を見出すことができると考えたからこそ、彼は「快樂」を客観的な善

としたのである。この物理科学的手法に基づく客観的証明を「物理的証明」と呼んだバラットに対して、シジウィックは倫理学の物理科学化には否定的であった。彼は、バラット論文に対するリプライを1877年の『マインド』に掲載し、次のように述べている。すなわち、「倫理学の『物理的な手法』に関しては、…そのような方法は不可能である、と述べることで十分である。倫理的な結論は、論理的にいて、倫理的な前提をもってはじめることによってのみ到達することができる。いかに倫理的な前提が獲得されるか、それを考えることは私の計画のどこにも含まれない」(Sidgwick 1877 b, 412)と。

『諸方法』における「物理的証明」の欠如を指摘したバラットは、続いてシジウィックが「内省的証明」に対して反駁しなかったことに注視する。バラットによると、シジウィックは、義務を重要視したために、快楽が普遍的な動機としながらも、その証明を不完全なものであるとした(Barratt 1877, 173)。シジウィックは、この主張のために、快楽と苦痛が自発的行為の唯一の動機であり、それらの強度に応じて行動することが「自省」によって与えられることを反駁する必要があるが、これを無視したとバラットは述べている。

このように、バラットは、『諸方法』において展開された方法を「さまざまな『倫理学の諸方法』ではなく、同一の方法による異なる帰結」(ibid., 168)と批判的にとらえたが、「実践理性の二元性」に対しても自説を展開した。

バラットによると、行為の目的は快楽であり、組織に属する行為者は自分の行為に対して内在的な関係と外在的な関係を有するという。したがって、行為には内在的原理と外在的原理という2つの原理がある。彼が述べるには、内在的原理とは組織を構成する単位である個人自身の快楽最大のための原理、すなわち「利己主義」である。他方、外在的原理とは組織のための原理であり、全体の幸福を目指す「功利主義」に他ならない。バラットは、人間の実践理性として、これら2つの原理が混じり合っているこ

とを認める。しかし、これらは同等の関係ではなく、行為者が属する組織が高度、複雑であればあるほど、周囲との調和を考え、利己主義よりも功利主義に比重をおくようになる。これを言い換えれば、組織がもっとも簡素なときは利己主義しか存在しない、ということになる。したがって、彼は、人間の本質的な性向とは利己主義であり、功利主義とはのちになって生まれたものである、と主張する。そして、功利主義への「動機」について考えたとき、それは賞賛や非難などのために行為の帰結や信念を変更することによって生じ、「どのような種類の功利主義の倫理的価値(Ethical value)も利己主義という1つの方法としてのみ存在しうる」(ibid., 185)とバラットは結論づけた¹²⁾。シジウィックは、このようなバラットの見解に対して、明示的な反論をおこなってはいない。やがてこの2人間の論争は、バラットの他界(1881)という形で結末を迎えた。

以上のように、倫理学における「諸方法」の解釈を巡る見解の相違に加え、「実践理性の二元性」を認めざるを得なかったシジウィックと功利主義も利己主義という基本原理へと還元されることを主張したバラットとの対立、これこそエッジワースが「論争」と呼んだシジウィック=バラット論争の構図である。

2. 『数理精神科学』以前のエッジワース

学生時代から古典および倫理学に優れた才能を発揮したエッジワース¹³⁾が1877年に出版した『倫理学の新方法と旧方法』は、このシジウィック=バラット論争を取りあげた著作である(Keynes 1933, 256 / 訳 339)。同書において、まずエッジワースは、バラットの倫理学への物理科学的手法の導入に賛意をあらわした。彼は、物理科学と倫理学との間の科学的な隔たりが大きいことを根拠とする物理科学的手法否定論に対峙し、演繹科学が別々の現象の組み合わせから演繹可能であることを強調した(Edgeworth 1877, 18)。すなわち、バラットが音響学によって空気の振動と音の印象とを結びつけたように、彼は物理科学と倫理学という2つの学

問分野の橋渡しをする1つの法則に注目したのである。それは感覚の強度(感覚量)を刺激の強度(刺激量)から演繹する実験心理学(精神物理学)の「フェヒナーの法則」(Fechner's Law)¹⁴⁾であった¹⁵⁾。エッジワースは、この「フェヒナーの法則」を快楽感覚量と快楽刺激量の関係に置きかえ、快楽感覚量を快楽刺激量について1階微分が正、2階微分が負という性質をもつ1本の関数式で表現した(*ibid.*, 42)¹⁶⁾。この関数式は、客観的に快楽を測定できるというエッジワースの意図を体現したものである。そして、その背景には、たとえばミルのような快楽の質の差を考える功利主義に対するエッジワースなりの解答を含んでいる。つまり、彼は、快楽に質の差があるように思えるのは快楽量にまったく桁が異なるほどの大きな開きがあるため、どのような快楽も同一単位で測定できるとしたのである。

シジウィック=バラット論争におけるもう1つの問題である「実践理性の二元性」にも目を向けたエッジワースは、シジウィックの実践理性についての定義を基本的に容認したうえで、道徳感情の「進化」(evolution)の概念によって、功利主義の側に統合しようとした。すなわち、彼は、「利己主義者も一般的善を求める欲求を涵養する力と動機とをもちえよう。実際、純粋な功利主義者ほどにではなくても、進化の進むなかで数世代のうちには、純粋な功利主義者にかぎりなく近づく程度には[なろう]」と主張している(*ibid.*, 33)¹⁷⁾。ここでエッジワースのいう道徳感情の進化とは、彼が普遍的幸福は洗練された人びとの間において生じると述べていることから(*ibid.*, 33)、具体的には社会的・階層的進歩にともなう利他的感情の拡大を意味しているだろう。これは、「実践理性の二元性」の解決方法についての正確な説明というよりもエッジワースの期待と受け取れる。この「実践理性の二元性」の解決方法は、後述するが、のちに『数理精神科学』において別のツールを用いて再論されることになる。いずれにせよ、『倫理学の新方法と旧方法』におけるエッジワースは、倫理学の物理科学化についてはバラットと

立場を同じくしたが、「実践理性の二元性」をめぐっては、シジウィックともバラットとも違う結論を導き出していた。

前述したように、『倫理学の新方法と旧方法』出版後、エッジワースは、のちの『数理精神科学』第II部「功利主義的計算法」として再録される「快楽主義的計算法」(1879)を発表した。彼は、同論文発表後にジェヴォンズと知り合い¹⁸⁾、彼の『経済学の理論』第2版(*The Theory of Political Economy*, 1879)、さらに彼の薦めでマーシャルの『産業経済学』(*Economics of Industry*, 1879)に触れ、本格的に経済学の研究にも取り組みはじめた(Egghworth 1925, 66)。エッジワースは、『数理精神科学』において、効用を「強度」と「時間」という2次元によって把握する概念や初歩的な効用関数形をジェヴォンズの『経済学の理論』から引いている(Egghworth 1881, 7, 20)¹⁹⁾。このようなジェヴォンズの影響によってはじめてエッジワースは、人間の満足に関する研究として、それまでの「功利主義による哲学的=倫理的アプローチ」、「精神物理学的アプローチ」に加え、「限界効用理論に立脚した経済学的アプローチ」という新しい説明ツールを手にしたのである(福岡1999, 189)。

III エッジワースの功利主義論

本節においては、『数理精神科学』におけるエッジワースの議論に注目する。前半においてはエッジワースによる「実践理性の二元性」の解決方法について、後半においてはエッジワースの功利主義論について詳説する。

1. エッジワースの「ダイアグラム」と「功利主義的取り決め」

前節において言及したシジウィック=バラット論争とエッジワースの『数理精神科学』との間にいかなる関係が存在するのか、を明らかにするのが、本節の目的である。

エッジワースは、上述したように、『数理精神科学』の序文において、シジウィックの『諸方法』を意識した叙述をおこなっている。すなわ

ち、「快樂の計算法(第II部)は、2種類——經濟的計算法と功利主義的計算法——とに分割することができる。この分割の原理は、シジウィック氏の『倫理学的諸方法』への補足を提示している」(Edgeworth 1881, v)と、さらに『数理精神科学』第II部の導入においてエッジワースは、シジウィックの快樂主義の区分が徹底されたものではない、と述べる。エッジワースによれば、「純粹利己主義的方法と純粹功利主義的方法という両極端な方法の間に無限の数の非純粹的方法が存在する」(ibid., 16)ため、ある主体の道德的構造がこれらの混合状態(μικτήρις)である可能性もある。しかしながら、「自制」(self limitation)の原理に基づいて、純粹功利主義者は競争者に博愛(benevolence)を与えることが有益であると考え、またたとえ「演繹された利己主義者」(Deductive Egoist)であっても功利主義的計算法を必要とする。これら进行分析することが「經濟的計算法」の目的である。

エッジワースは、『数理精神科学』第I部において、数理科学と道德科学との間における類似性を指摘し、また物理科学におけるエネルギーと道德科学における快樂の役割を同じものとみなした。基本的には、『倫理学の新方法と旧方法』においてすでにバラットと同じく、倫理学を含む道德科学への物理科学的手法導入に賛同する彼は「經濟的計算法」において数学的手法を取り入れながら²⁰⁾、利己主義についての考察をおこなう。

この計算法において彼は、あらゆる主体が利己心に基づいて行動する(利己主義者である)こと(「經濟学の第一原理」)²¹⁾、自由な情報交換が存在すること、さらに完全な競争フィールドに関する4条件が満たされていることを仮定した²²⁾。

以上のような仮定のもとで「經濟的計算法」における2つの問題、つまり「契約はどの程度不確定であるか」、また不確定性が存在するならば、「どのような方法によって、その弊害から逃れることができるのか」(ibid., 20)という問題にエッジワースは注目する。これらの問題の分析のために、ロビンソン・クルーソーとフラ

イデーとの間の契約問題を例にとり、導入された図が「ダイアグラム」である²³⁾。エッジワースは、この「ダイアグラム」において、まず1人のクルーソーと1人のフライデーの取引から始め、続いて2人のクルーソーと2人のフライデー、3人のクルーソーと3人のフライデー、…と取引の場にクルーソーとフライデーのクローン(同質の主体)を導入していく。その結論として、一対一の契約でもっとも「行き詰まり」に陥りやすく、二対二の契約では一対一のときよりも、三対三の契約では二対二のときよりも契約曲線の範囲が収縮し、契約が徐々に確定性を増していくことを論じた。最終的に、クルーソー(のクローン)とフライデー(のクローン)の数が無限に達したとき、経済学でいうところの完全競争状態になり、契約曲線の範囲は1点に定まる。ジェヴォンズの交換理論では、「無差別の法則」(一物一価の法則)によって交換比率が一意に確定してしまうのに対し、エッジワースの契約論的説明においては、完全競争状態を除いて、交換比率は一意ではない。ここにエッジワースによるジェヴォンズ批判がみられる。

エッジワースがこの推論より得た結論とは、競争フィールドにおいて「原子の多数性(multitude of atoms)」が存在しない場合に、「経済学者たちが…競争に対して払っている畏敬の念が失われる」(ibid., 50)ことである。競争者の数が有限であるかぎり、契約は不確定なものである。さらに彼は、このような「不確定性」が、「国際政治、国内政治、そして民族間、階級間、両性間」といった「広い意味合いにおけるあらゆる領域の契約」にともなう問題であることを強調した(ibid., 51)。

あらゆる契約につきまとう不確定性という弊害は、各々の取引者の効用と社会全体の効用が同時に最大となる「功利主義的取り決め」(utilitarian arrangement)を選択することによって回避される。エッジワースは次のように述べている。「競争は仲裁によって補われなければならない。利己的な契約者たちの間の仲裁の基礎は〔自分および社会全体の〕総効用を可能なか

ぎり最大にすることである」(ibid., 56)と。たとえ不確定性が存在するとしても、自分の効用と「有効同感係数」(coefficient of effective sympathy)によってウェイトづけした他者の効用との和の最大化を目指すことによって「功利主義的取り決め」が示す点(「功利主義的点」)は達成される²⁴⁾。このように、シジウィックが「利己主義」と「功利主義」との間の一致を「宗教」と「同感」という2つの観点から検討したのに対し、エッジワースは、「宗教」に頼ることなく²⁵⁾、また、かつて『倫理学の新方法と旧方法』において持ち出した「進化」の概念に頼ることもなかった。彼がここにおいて成功したのは、これは『倫理学の新方法と旧方法』のときとは異なる新しいツール、すなわち、契約理論の説明を通じて導き出した「同感」による「実践理性の二元性」の統合である。この意味において、エッジワースの議論は、たしかに「功利主義の人間観を修正し利他心を組み込む…試み」だったと評価されよう。また同時に彼は、功利主義を利己主義の一種とみなしたバラットとは異なり、利己主義者たちの間においても「仲裁原理」となる功利主義という方法が必要であることを論じたのである²⁶⁾。「したがって、経済的計算法は功利主義的計算法へと導かれる」(ibid., 56)。

ここで、エッジワースのいう「功利主義的点」が、数量的に平等な分配(「数量的中庸」(quantitative mean))ではないことに注意しなければならない。彼は、この「数量的中庸」が「功利主義的点」の近傍に存在する可能性は認めるものの、これを「功利主義的点」とはみなさない。この2つが同じものとみなされるのは、「功利主義的」という言葉のなかに「平等性」が暗黙的に了解されているためであるとするエッジワースは、「質的中庸」(qualitative mean)こそ「功利主義的公正」であると「経済学的計算法」の末尾において示唆している。「数量的中庸」と「質的中庸」という2つの「中庸概念」を比較したとき、エッジワースが用いる「功利主義」あるいは「功利主義的」という言葉の内側には独特の概念が含まれていることは明らかである。

彼の考える「功利主義」あるいは「功利主義的」とはどのようなものなのか。この問題は、「経済的計算法」に続いて論じられる「功利主義的計算法」に委ねられる。

2. エッジワースの「精密功利主義」

エッジワースは、『数理精神科学』序文において、この「功利主義的計算法」の概要について簡単に触れている。そのなかで彼は、この計算法のテーマを、行為の目的としての「最大幸福原理」の証明、そしてシジウィックの功利主義の批判的取り扱いとしている。より具体的には、「〔私は〕功利主義のなかに必然的に平等性が含まれるという想定を否定する。なぜならば、感覚を有する人たちの幸福に対する受容能力が異なるならば、…諸状況の平等がもっとも幸福をもたらす取り決めであると想定できないからである」(ibid., vii)と述べており、明らかに彼は功利主義の暗黙的了解である「平等性」を容認していない。彼がこのような立場をとるのは、シジウィックの『諸方法』をはじめベンサム主義的な功利主義思想に対して疑念を抱いていたからにほかならない。

エッジワースは、ベンサムが人間の行為の目的に精密な数量的手法を適用しようとしたことについては高く評価している(ibid., 117)。しかしながら、最大幸福原理をあらわす「最大多数の最大幸福」という語句の解釈について、彼は独自の見解をもって批判的にとらえた。すなわち、彼はランプをたとえとして、「(より多くの原料を与えられた)少数のランプが得る大きな光を想像すれば…、その基準は確かな意味合いを与えるのか」(ibid., 117-18)と述べる。このランプのたとえは『倫理学の新方法と旧方法』においても見いだされるが(Edgeworth 1877, 74)、これをもって彼が意味しようとするのは、一定量の分配物(distribuend)が一定数の分配者(distributees)に与えられるとき、分配物の大部分を少数の者が所有することによって集団としての幸福の総計が最大になることもありうる、ということである。当然のことながら、このような分配による幸福最大化を肯定す

るためには、個人の幸福に対する受容能力に大小があることが前提である。このとき、平等分配は、個人の幸福に対する受容能力が等しい場合にかぎり容認されるのみである。

シジウィックは、エッジワースが指摘するように、『諸方法』において個人の幸福に対する受容能力の差異には目を向けてはいた²⁷⁾。彼は、分配問題において、最大幸福を得るために平等に分配されるべきは「幸福をもたらす財産」(means of happiness)ではなく、「幸福」そのものであると述べている。エッジワースやシジウィックのように個人の受容能力の差異を認めるとき、最大幸福を達成するためには財産はもちろん、幸福も平等に分配されるべきではない。ところがシジウィックは、この個人の受容能力の差異を考慮する快樂主義的計算法は不明瞭であるとしたために、「功利主義原則はこの問題になにも解答を与えない」(Sidgwick 1877a, 384)と消極的姿勢をとる。彼は同時に、「ほとんどの功利主義者が暗黙のうちに、あるいは明白に適用している原理は、純粹平等の原理である。それはベンサムの定式において与えられているように、『すべての人は1人とみなされ、誰も1人以上とみなされない』ということである。そして、この原理は明らかにもっとも単純で、特別な正当化を必要としない唯一のものである。なぜなら、…その人の扱いを違えなければならぬ明白な根拠がなければ、他の人と同じ方法でその人を扱うことが合理的であるに違いないからである」(ibid., 385)、と主張し、「幸福の平等分配」という形でベンサム主義を容認するにいたる。このシジウィックの立場を「矛盾」とみなしていたエッジワースは、『数理精神科学』第II部後半の「功利主義的計算法」において、功利主義における「最大幸福原理」についての精密化をはかった。

エッジワースは、まず次の4つの定義 (definitions) を羅列的に提示する。(1)「快樂〔という言葉〕は一般的に『好ましい感情』に対して用いられる」(Edgeworth 1881, 56)。(2)「財産 (means) は快樂の分配を可能にする近似手段である」(ibid., 57)。(3)「同量の任意の財産に

対して、より大きな快樂量を獲得する、そしてまた (同量の) 任意の財産の同じ増分に対して、より大きな快樂量を獲得するならば、その個人は他者よりも幸福に対する受容能力が大きい」(ibid., 57)。(4)「同量の任意の労働がなされたとき、こうむった疲労量がより少ない、そしてまた (同量の) 任意の労働の同じ増分に対して、こうむった疲労の増分がより少ないならば、その個人は他者よりも労働の受容能力が大きい」(ibid., 59)。ここで (3) と (4) は、「財産」と「労働」、「快樂」と「苦痛」を置き換えただけの正負関係にあり、エッジワースは、(4) の現実性が自明であるため、これと逆の符号関係をとる (3) もまた現実的なものとして確立できるとする。

つづいてエッジワースは、「快樂は測定可能であり、あらゆる快樂は同一単位で計測可能である」(ibid., 59) ことを公理としてたてる。彼は、『倫理学の新方法と旧方法』において、「フェヒナーの法則」を快樂に応用し、同一単位による快樂測定が可能であると考えていたが、『数理精神科学』においてもこの考えを採用する。同書においては、かつてあらわした関数式こそ提示していないものの、彼は、「時間1単位の間には快樂強度1単位を経験するいかなる個人をも『1と数える』べきである」(ibid., 8) と簡単に快樂の単位を明らかにしている。このようにして快樂は数量的に把握できるため、当然のことながら、エッジワースの考えにおいて快樂の基数的な個人間比較は容認される。

このような諸定義や公理のもとにおいて、快樂の増分は財産が増加するにつれて減少すると考えられるため、財産の増分はもっとも快樂に対する受容能力が大きい人に、その次の財産の増分は2番目に大きい受容能力をもつ人に与えられるだろう。このような方法によって分配が行われれば、たとえ少数のものにのみ財産が分配されたとしても、彼らの快樂に対する受容能力が大きいため集団としての総快樂最大は達成される、というのがエッジワースの考えるところである。したがって、「一般的には、快樂に対してより大きな受容能力をもつ人がより多くの

財産と快樂を得るべきである」(ibid., 64)。同様に、疲労の増加は労働量が増加するにつれて増大すると考えられるので、労働の最初の増分はもっとも労働に対する受容能力(苦痛に対する耐性)が大きい人に、その次の労働の増分は2番目に大きい受容能力をもつ人に与えられるべきである。このようにしてエッジワースは、「労働に対する受容能力がもっとも大きい人がより多くの労働をなすべきである」(ibid., 66)と述べている。

ここで問題となるのは、いかにして個人の快樂や労働に対する受容能力を確かめることができるのか、ということである。この点についてエッジワースは、これら2つの受容能力は釣り合いをとりながら、進化と共に増大する、という見解を唱える。エッジワースは、この受容能力と進化との関係をすでに『倫理学の新方法と旧方法』において、スペンサーやバラットから採用したが²⁸⁾、この考えを『数理精神科学』において教育に適用する。結論として彼は、同じ程度の進化によって人間全体が進歩することは望ましいものの、これを達成するためにすべての人びとに同じ教育を与えることには反対した。それは、「進化の序列においてもっとも高度なものが教育と改善についてもっとも有能であり」…一般的な進歩において、もっとも進歩したものがもっとも進歩する」(ibid., 68)からである。ところで、快樂や労働に対する受容能力は教育によって後天的に増大される(あるいは縮小される)ことはないであろうか。この疑問についてエッジワースは、「遺伝について知られていることに直面すれば、まったく主張することはできない」(ibid., 59)と取り合おうとはしない。同様の主張はこれだけにとどまらない。遺伝的選択の働きのために、族内婚が規則化されなかり、親世代の受容能力が優れていることがその世代にとって、そしてその後のあらゆる世代にとっても有益である、とも彼は述べている。『倫理学の新方法と旧方法』において社会的・階層的進歩を指していたエッジワースの「進化」概念は、『数理精神科学』にいたって、ゴールトン(Galton)の『遺伝的天才』(Hereditary Genius, 1879)からの引用が垣間みられるように(Edgeworth 1881, 72; Galton 1879, 415)、優生学的な思考を内包するようになる。同階層において各個人の受容能力には多少の差異は存在するが、全体的な傾向として遺伝的に優れた受容能力を受け継ぐ人びとが上層階級であり、彼らはより進歩することが可能である。これこそがエッジワースの「進化」概念であった。

このようにして快樂や労働に対する受容能力は、全体としては階級の差によって、また細かくは個人によって各々異なるため、「功利主義」の暗黙的了解である「平等性」がそのまま「分配的正義」とはなりえない。むしろ、財産の不平等分配が最大幸福をもたらすための「分配的正義」として適切である、とエッジワースは主張する²⁹⁾。彼は「平等性」という語句がもつ力をホメロスが『イリアス』(The Iliad)のなかで描いたゼウスにたとえる。すなわち、「彼〔ゼウス〕は幾多の城壁をすでに地上にうち崩し、この後続きて崩すべし、彼〔ゼウス〕の神威はものすごし」(Edgeworth 1881, 77)³⁰⁾と、エッジワースにとって「平等性」によってうち崩されるように思えたのは「慣行という外壁」であるが、この「慣行」こそが「適切な不平等分配」のために社会的に重要なものであると説明される。

ここでエッジワースのいう慣行とは、具体的には、階級差や性差である。たとえば、階級存在を考えたとき、貴族たちがより多くの報酬を得るのは、快樂に対する受容能力が大きいものが同時に兼ね備える優れた技能と豊かな知能を有するためである。逆に下級階層には、彼らにとってもっとも可能であるように思える仕事(肉体労働)が割り当てられる。また、女性が厳しい労働から免除されるのも、労働に対する受容能力がより大きい強者、すなわち男性がより多くの労働をすべきだからである³¹⁾。これらの慣行には経済学が与える以上に功利主義的な根拠が存在する、とエッジワースは主張する。「将来社会の階級について、常識は平等なユートピアをまったく期待しない」(ibid., 79)と述べたエッジワースの目には、「生活に関する競争の

原理」が「功利主義的選択」(utilitarian selection)へと人びとを導くように映ったのである。

以上で説明されたような功利主義をエッジワースは「精密功利主義」(exact utilitarianism)と呼んだ。そして、この「精密功利主義」は政治学の目的を与えると彼はいう。利害衝突を調整するための政治的契約は、彼によると、2つの性質を備えていなければならない。すなわち、(1)明確で確固たるものであり、普遍的に同じ意味において解釈されなければならない性質と、(2)現状よりも別の契約によってより良い生活を送れる、と力をもつ階級(上層階級)が考える根拠のないようにしなければならない性質である。この2つの性質を考えたとき、エッジワースは2つの功利主義の適用が可能であるとす。すなわち、「万民同等的功利主義」(isocratical Utilitarianism)と「精密功利主義」あるいは「貴族制的功利主義」(aristocratical Utilitarianism)である。「万民同等的功利主義」は「平等性」を重視する功利主義であるため、第1の性質において優れており、「精密功利主義」あるいは「貴族制的功利主義」は不平等を認めるため、第2の性質において優れている。エッジワースが第2の性質を重視していることは、これまでの説明に加え、『『あらゆる男性、あらゆる女性を同じものと数える』原理は、まさに慎重に適用されるべきである』(ibid., 81)と述べていることから明らかである。また、彼は、平等投票権ではなく、J. S. ミルが『代議制統治論』(Considerations on Representative Government, 1861)において主張した複数投票権が是認されるべきであるとした。これは、エッジワースがミルの主張した賢明さに加えて、各個人の幸福に対する受容能力を考慮したためであった。

このようにエッジワースが「功利主義」あるいは「功利主義的」という言葉を用いるとき、その背後には、各個人の受容能力の差異の存在に基づいて名目的な「平等性」を否定的にとらえる「精密功利主義」、あるいは「貴族制的功利主義」が強調されているのである。

IV 結 語

これまで述べてきたように、エッジワースの『数理精神科学』は、シジウィックやバラットを中心に、さまざまな知的源泉から生成された著作であった。

1870年代後半のエッジワースの視線は、シジウィック＝バラット論争を端緒として、「実践理性の二元性」という問題に向けられていた。彼は、『倫理学の新方法と旧方法』においては道徳感情の進化の概念をもって、利己主義の功利主義側への統合を主張した。ただし、この段階におけるエッジワースの解説は彼の期待に過ぎず、「実践理性の二元性」の解決方法としては、説得力に欠けるものであった。

『倫理学の新方法と旧方法』から4年を経た『数理精神科学』においては、ジェヴォンズの限界効用理論に基づく交換理論を批判的に摂取しながら、より綿密な議論が展開された。エッジワースは、その際、「ダイアグラム」を利用することにより、利己主義者たちの間の契約には不確定性が存在し、その仲裁原理として功利主義が必要不可欠であることを結論した。しかし、彼の契約理論は、経済学という枠組みに収まるものではない。ここには、「実践理性の二元性」という問題が、市場における取引契約に内在する不確定性として認識されている。したがって、エッジワースが示したのは、シジウィックともバラットとも異なる、利己主義世界における利己主義適用上の限界と功利主義への統合という「実践理性の二元性」に対する1つの解答でもあった³²⁾。

実践理性としての功利主義の重要性を明らかにしたエッジワースは、同質を前提とした個人についての議論(「経済的計算法」)から異質な個人から構成される社会全体についての議論(「功利主義的計算法」)へと視点を移し、独自の功利主義論を展開した。松嶋(1989, 43; 2005, 49)が認めるように、エッジワースはシジウィックを高く評価していたが³³⁾、彼の功利主義に納得していなかったのはIII節において述べたとおりである。彼の功利主義は、バラット

の倫理学の物理科学的手法に影響を受け、快楽の同一単位計測可能性を前提とした。さらにスペンサーらの進化論にゴールトンからの影響を付加した優生学的な進化概念に基づいて、個人の快楽や労働に対する受容能力の差異を強調したエッジワースは、「平等性」を批判し、各個人の受容能力に応じた財産の「不平等分配」こそ「分配的正義」とする。また彼は、ランプのたとえにみられるように、全体としての効用が最大になるのであれば、分配の偏重をも容認した。このような内容を含む功利主義を、エッジワースはみずから「精密功利主義（貴族制的功利主義）」と呼んだ。彼の精密功利主義は、シジウィックの功利主義に対する補足であるのみならず、完全平等を仮定するベンサム主義的功利主義への批判であり、また、ミルのような快楽の質の差を考える功利主義に対する反論でもあった。

以上のようなエッジワースの議論は、やがて「課税の純粹理論」(The Pure Theory of Taxation, 1897)の基礎となる。すなわち、彼は、契約理論を根拠として利益説を採用することを拒否し、また各個人の受容能力の差異から所得を完全平等とするような課税にも反対したのである。これらを具体的に説明するには別稿が必要となろう。

ところで、『数理精神科学』におけるエッジワースの見解は、当時の経済学者たちにどのように受けとめられたのか。『数理精神科学』についての代表的な書評としては、マーシャルによるもの(Marshall, 1881)とジェヴォンズによるもの(Jevons, 1881)が挙げられる³⁴⁾。マーシャルは、その書評において、「経済的計算法」に注目し、エッジワースを「天才」と讃えたが、同時にその抽象的議論の複雑さと数学的すぎる点を批判した。他方、マーシャルとは対照的に「功利主義的計算法」を主に取りあげたジェヴォンズも、『数理精神科学』を非凡な著作と賞賛した一方で、彼の議論に全面的に賛成というわけではなかった。たとえば、エッジワースの性差に関する考えについては、アポリジニーの夫が妻に荷物を運ばせ、これに従わない場合に

は妻を殴る光景を目にした自身のオーストラリアでの経験から、「人類学者たちは今のところ原始社会における女性の不運な地位について理論的に納得させることにほとんど成功していない」(Jevons 1881, 582)と述べている。少なくともジェヴォンズは、エッジワースの慣行に関する議論は厳格な公平性についてというよりも社会のヒエラルキーについてのもの、と評価した。

ジェヴォンズと同じく、エッジワースの議論を社会階級のヒエラルキーの正当性を訴え、また性差の容認と理解する論者もいるが³⁵⁾、エッジワースにとっては当時の慣行こそ、精密功利主義に基づいて肯定される以外のなにもものでもなかった。実際、彼は、この精密功利主義的な基礎をもつ社会を「最良のものへの一次近似である自然の景観」と評価し、その景観に感銘を受ける、とすら述べているのである(Edgeworth 1881, 82)。

このように、『数理精神科学』は、シジウィック＝バラット論争を端緒とし、『倫理学の新方法と旧方法』を経て、哲学、心理学、そして経済学などさまざまな思想を摂取しながら、倫理学および経済学を接合する著作となったのである。それゆえに、経済理論的・経済学史的取り扱いの域にとどまる従来の研究では、『数理精神科学』の部分的理解にすぎないといえるだろう。これは、同書を指して、エッジワース自身が、「道德哲学と経済学を等しく扱った」と述べていることから明らかである(MSS Edgeworth D/7-13)。つまり、『数理精神科学』は倫理学と経済学とを取り扱った著作であり、またそれゆえにエッジワースが同書を『数理精神科学』と名付けたと考えることが、より自然な理解であろう。

[付記] 2005年および2006年2月、日本学術振興会からの科学研究費補助金(研究課題名:「19世紀後期英国経済思想史—F. Y. エッジワースを中心に」)により、ダブリン、ロングフォード、ベルファスト、およびオックスフォードにて資料調査をおこなった。同調査でお世話になったTrinity College, DublinのA. Murphy教授およびManuscripts Department, County Longford

Library および Jack Stewart 氏, Oxford の Bodleian Library, Archives Assistant の Nicholas Smith 氏, Balliol College Library, Nuffield College Library, そして同調査を遂行するにあたってさまざまな便宜をはかってくださった Queen's University, Belfast の R. D. Collison Black 名誉教授に感謝の意を表します。

上宮智之：関西学院大学非常勤講師

注

- 1) *Mathematical Psychics* の訳語としては、『数理心理学』がよく用いられてきた (Creedy 1981, 73 / 訳 77 : Keynes 1933, 255 / 訳 338 : 松嶋 2005, 40) が, 本稿ではこれを『数理精神科学』とした。 *The Oxford English Dictionary* によれば, Psychics とは, 「心理学的, あるいは精神的現象についての科学」 (*O.E.D.* Vol. 8, 1550 r) である。 エッジワースの *Mathematical Psychics* は直接的に心理学分野を扱ってはいないため, より幅広い意味として本稿では『数理精神科学』と訳すことにする。
- 2) 引用文中の表記は, 用語の統一のため, 筆者において適宜一部修正をおこなっている。 また, 本稿における引用文中の〔 〕は筆者による補足をあらわす。 また, 傍点箇所は, 原著においてはイタリック部分である。
- 3) クリーディー, 根岸および松嶋は, ハルサニによる「新功利主義」の先駆とみなしている。 しかし, 中野 (1995) が述べているように, エッジワースのいう「不確定性」と新功利主義における「不確定性」の意味は異なり, この評価には一定の距離をおかねばならない。
- 4) 「功利主義的計算法」において論じられたエッジワースの快樂受容能力についての議論に注目した研究には Peart and Levy (2005) が存在するが, これは逆に「功利主義的計算法」の「経済的計算法」との関連を省略している。
- 5) バラット (1844-81) は, ラグビー校を経て, 1862 年にオックスフォードのベイリオル・カレッジ (Balliol College) に入学し, 1868 年には同ブレースノーズ・カレッジ (Brasenose College) のフェローとなった。 また, 1872 年には法廷弁護士資格を取得している。 バラットが 1869 年に出版した『物理倫理学』は, 「24 歳という若人としてはもっとも注目すべき偉業であり, 幅広い学識と見事な文才を示している」と評価された (*Dictionary of National Biography*, Vol. 1, 1194-95)。
- 6) 『倫理学の新方法および旧方法』は, 『諸方法』第 2 版とほぼ同時期に出版されたようである (Edgeworth 1877, 1)。 したがって同書の内容は, 『諸方法』初版を参照して執筆された。 他方, エッジワースは, 『数理精神科学』執筆に際しては, 『諸方法』第 2 版を参照している。
- 7) ニューマンが述べるように, 「快樂主義的計算法」と「功利主義的計算法」との間には本質的な変化はない (Newman 2003, xxv)。 加筆修正部分については, Creedy (1986, 135-50) に収録されている付録「『数理精神科学』についてのノート」を参照のこと。
- 8) 本文中では触れなかったエッジワースによる最初の論文, 「マシュー・アーノルド氏によるバトラー司教の自愛論」 (Mr. Matthew Arnold on Bishop Butler's Doctrine of Self-Love) は, 1876 年の『マインド』誌に掲載された。 この論文は, アーノルド (M. Arnold) によるバトラー (J. Butler) の自愛論解釈に対する論評であった。 なお同論文の著者名は T. Y. Edgeworth と表記されているが, 今日これはエッジワースによるものとされている (Edgeworth 1876, 571)。
- 9) ここでの用語は, 奥野 (1999) にしたがった。 奥野によれば, シジウィックの実践理性とは, 「ある真理の認知に基づいて衝動や動機を与え, 意志を促す能力」のことである (奥野 1999, 68)。
- 10) 『『倫理学の諸方法』は, 利己主義と直観主義の 2 つが先に論じられ, 最後の第 4 部に功利主義の方法が論じられるという展開をみせており, あたかも功利主義が 3 つのうちで最も重要な方法であるかのような印象を与える。 …第 2 版序〔文〕では, この著作で彼が直観主義と利己主義の 2 つの方法を攻撃し功利主義を擁護した, と一部の人びとにみなされたのは誤解だと嘆いている」 (奥野 1999, 26)。
- 11) バラット以外にシジウィックを批判した人物として, ベイン (Bain), ブラッドレー (Bradley) およびグリーン (T. H. Green) が挙げられる (Schneewind 1977, 192 ; 行安 1992, 196)。
- 12) バラットは, 1878 年の『マインド』誌に, 「倫理学と精神発生」 (Ethics and Psychogony) を掲載した。 そのなかで彼は, 『諸方法』が第 2 版になってかなりの部分が変わったことを認める一方で, シジウィックが心理学や倫理学の側面から精神発生について考慮していないと主張している (Barratt 1878, 277)。 なお, 同論文においてバラットは, エッジワースの『倫理学の新方法と旧方法』についても取りあげているが, これについては別稿において論じたい。

- 13) エッジワースは、1861年7月から1865年12月にかけてダブリンのトリニティ・カレッジ (Trinity College, Dublin) に在籍し、イングラム (J.K. Ingram) をチューターとしたが、少なくともこの期間に彼が同カレッジの授業を通じて経済学を勉強した形跡はない。彼は、古典や倫理学の優等試験 (Examination for Honors) において幾度も第1級の成績を修めている (TCD MUN/V/28/2, TCD MUN/V/30/21-24)。また、1867年1月からはオックスフォードに勉学の間を移し、主にベイリオルに所属した。ケインズは、このベイリオル時代に、ジョウエット (B. Jowett) によってエッジワースが経済学を学んだ可能性を指摘しているが、同時にそれは本格的なものではないとしている (Keynes 1933, 255 / 訳 338)。
- 14) 簡単に述べると、フェヒナーの法則は、感覚量を γ 、刺激量を y 、丁度可知差異 (just noticeable difference) を k 、刺激閾を β としたとき、 $\gamma = k(\log y - \log \beta)$ という関係で表される。ここで刺激閾とは、それよりも弱くすると刺激を感じなくなる刺激量の値のことであり、また丁度可知差異とは刺激閾から少しずつ刺激を増減して、はじめてその増減を感じるときの刺激の増減量のことを指す。はじめに与えられる刺激量を y 、わずかに知覚できる刺激量の増分を dy とすれば、 y と dy の比は常に一定であり、 $dy/y = k$ と表すことができる。これを「ウェーバーの法則 (Weber's Law)」といい、 k は丁度可知差異である。いま、刺激 y に対する感覚量を γ 、 dy による感覚の増加を $d\gamma$ とすれば、 $d\gamma = k dy/y$ となり、フェヒナーはこれを基本公式とした。丁度可知差異1回を感覚量1として測定すれば、刺激の一定比が増加するごとに感覚量1が増加するので、感覚量 γ が1, 2, 3, ..., n と増加するためには、刺激量 y は、 $(1+k)$ 、 $(1+k)^2$ 、 $(1+k)^3$ 、..., $(1+k)^n$ と増加せねばならず、この関係は、 $\gamma = \log y$ である。しかし、刺激量が少なすぎると感覚は生じないので、識閾 (はじめて刺激を感じる際の刺激の強さ) を β とすれば、感覚の強度は、識閾の時の感覚から今与えられている感覚に達する間の丁度可知差異の数によって表されるので、 $\gamma = k(\log y - \log \beta) = k \log y / \beta$ という数式が与えられる。これがフェヒナーの法則に基づく感覚の測定公式である (今田 1962, 186-87; 誠信心理学辞典 1981, 388r, 1731, 3161)。
- 15) フェヒナー (G. T. Fechner) は、精神的な世界は物質的な世界を通じて理解される、との考えから、同じくドイツの生理学者ウェーバー (E. H. Weber) の研究を出発点として、「精神物理学」を打ち立てた。『精神物理学』 (*Elemente der Psychophysik*, 1860) に代表されるフェヒナーの研究は、心理学者ヴント (W. Wundt) に影響を与えた。1879年に世界最初の心理学実験室をライプチヒに創設したヴントがドイツ実験心理学の創始者とされているが、フェヒナーの『精神物理学』を実験心理学の創始とみる評価もある (今田 1962, 180-84; 誠信心理学辞典 1981)。
- 16) エッジワースによると、快樂感覚量を π 、快樂の丁度可知差異、すなわち「快樂の受容能力」を k 、1階微分が正かつ2階微分が負という性質をもつ関数を f 、快樂刺激量を y 、快樂の刺激閾を β とすれば、 $\pi = k|f(y) - f(\beta)|$ という関係であらわされる (Edgeworth 1877, 42)。
- 17) 邦訳については、松嶋 (2005, 49) を参照した。
- 18) これについては、Edgeworth (1881, 34n1)、Black (1962, 215)、Creedy (1986, 43) などを参照のこと。
- 19) ジェヴォンズとエッジワースの効用関数との関係については、上宮 (2005, 127-28) を参照のこと。
- 20) エッジワースが社会科学における数学の役割を重視していることは、次の一文から明らかである。「常識という金塊を最上の科学を備えた造幣局で試し、鑄造するかのように、数学によって可能なかぎり自己の結論を証明しようとしないう人間は、自分も持っているものの本当の価値をほとんど知ることはないだろうし、条件が少し変わろうものなら、彼はそれがどのような価値をもつのかを判断する尺度や、それを伝え、またそれを普及させる手段をもたないことになるだろう」 (Edgeworth 1881, 3; 訳は Creedy 1981, 75 / 訳 80 参照)。また彼は、『数理精神科学』付録I「非数式的数学」 (Unnumerical Mathematics) において、クルノー (Cournot) を「数理経済学の父」と高く評価している (*ibid.*, 83)。
- 21) したがって、エッジワースの「経済的」 (economical) を「利己的」 (egoistic) と同義にみなして問題はない。
- 22) エッジワースは完全な競争フィールドに関する4条件を、(i) 任意の個人は、無数の個人のうちの任意の1人と自由に再契約することができる、(ii) 任意の個人は、同時期に、無数の個人と自由に契約することができる、(iii) 任意の個人は、任意の第三者の同意を必要とせず、他者と自由に契約することができる

- る、(iv) 任意の個人は、第三者とは無関係に、他者と自由に契約することができる、と定義している (Edgeworth 1881, 18-19).
- 23) エッジワースは自分の図を単に「ダイアグラム」と呼んだ。オリジナルの「ダイアグラム」については、Edgeworth (1881, 28) を参照のこと。
- 24) このとき、エッジワースは、明示こそしていないが、有効同感係数を 0 以上 1 以下と仮定し、また、この係数は個人によって異なるとも考えている。ただし、この係数が具体的にどのような与えられるかについて、彼は触れていない。エッジワースの有効同感係数を考慮に入れた効用関数については、Edgeworth (1881, 53), Collard (1975, 358-60), 中野 (1995, 177), 上宮 (2005, 120) を参照のこと。
- 25) 「宗教の重要性を軽視することは断じて快樂についての哲学が意図するところではないのだけれども、現在の研究において、そして人間本性のより低い要素の取り扱いにおいて、われわれは利己心の原理から功利主義の原理、あるいは少なくともその実践へのより明白な変転、より現実的な移行を求めるべきである」(Edgeworth 1881, 52-53)。
- 26) 松嶋は、このエッジワースの「仲裁原理」に関する叙述をマーシャルの『産業経済学』3編8章「仲裁、調停」からの影響であると指摘している (松嶋 2005, 48)。確かに『数理精神科学』において、エッジワースは『産業経済学』についての叙述に少なからず触れている。しかし、エッジワースにとってのより大きな問題は、『倫理学の新方法と旧方法』以来関心を払い続けてきたシジウィック=バラット論争であり、そのなかにおける「実践理性の二元性」問題を解決する手法として『産業経済学』などを参考とした「経済学的アプローチ」が導入されたということができよう。
- 27) エッジワースはシジウィックが個人の幸福受容能力の差異について認識していた証拠として、「同じように幸せになるために、なかにはより多くの〔分配物〕を必要とする人間もいるし、あまり〔分配物〕を必要としない人間もいるのである」(Sidgwick 1877a, 256n) という一文を引用している (Edgeworth 1881, 124)。
- 28) これについては、Edgeworth (1877, 72) および Edgeworth (1881, 58) を参照のこと。
- 29) 各個人の快樂や労働に対する受容能力が等しい場合にかぎって、財産の平等分配は「分配的正義」を満たすが、これは例外的な事例とみなされる。
- 30) エッジワースが少年の頃からホメロス (ホーマー) を読んでいたことは、ケインズの「エッジワース伝」によってよく知られている (Keynes 1933, 266 / 訳 351)。なお邦訳は、土井晩翠訳 (1995, 56) を参考とした。
- 31) しかしながら、このような「思いやり」は同性の強者から弱者へは与えられることはない。なぜなら、同性同士の場合、博愛へと向かわせる自然的本能が欠如しがちであり、「思いやり」という義務を感じさせるために必要な「強さ」という規準も曖昧である、とエッジワースは主張する。
- 32) 実際に彼は、「具体的な19世紀の人間の大部分が、非純粹利己主義 (impure egoist) であり、混合功利主義者 (mixed utilitarian) である」という見解に賛成している (Edgeworth 1881, 104)。
- 33) 「利己主義と功利主義との間の峻別は、シジウィック氏がその類いまれなる手腕をもって引き出した」(Edgeworth 1881, 102)。
- 34) その他、評者不明ではあるが、1881年の『マインド』293ページに『数理精神科学』に対する書評が掲載されている (Anon. 1881, 293)。
- 35) 「『数理精神科学』77-79ページにおいて、読者は階級差別、そして何よりも性差別に対する全面的な正当化を目にすることができる」(Arrow 1994, 94)。

参考文献

- (書簡)
MSS Edgeworth D/7-13. Nuffield College, Oxford.
- (大学記録)
Examinations Returns 1856-1866 (TCD MUN/V/28/2). Manuscripts Department, Trinity College, Dublin.
Term & Examination Returns form Michaelmas 1861 to Michaelmas 1862 (TCD MUN/V/30/21). Manuscript Departments, Trinity College, Dublin.
Terms & Examination Returns from Michaelmas 1862 to Michaelmas 1863 (TCD MUN/V/30/22). Manuscripts Department, Trinity College, Dublin.
Terms & Examination Returns from Michaelmas 1863 to Michaelmas 1864 (TCD MUN/V/30/23). Manuscripts Department, Trinity College, Dublin.
Terms & Examination Returns from Michaelmas 1864 to Michaelmas 1865 (TCD MUN/V/

- 30/24). Manuscripts Department, Trinity College, Dublin.
- (文献)
- Anon. 1881. *Mathematical Psychics*. By F.Y. Edgeworth. London: Kegan Paul, 1881. Pp. 148. *Mind* 6: 293.
- Arrow, K.J. 1994. Edgeworths Ethik. In *Francis Ysidro Edgeworth und seine "Mathematical Psychics,"* edited by K.J. Arrow, W. Hildenbrand and P. Newman. Dusseldorf: Verlag Wirtschaft und Finanzen.
- Barratt, A. 1869. *Physical Ethics*. Bristol: Thoemmes Press, 1991.
- 1877. The 'Suppression' of Egoism. *Mind* 2: 167-86.
- 1878. Ethics and Psychogony. *Mind* 3: 277-83.
- Black, R.D. Collison 1962. W.S. Jevons and the Economists of his Time. *Manchester School* 30: 203-21.
- Collard, D. 1975. Edgeworth's Propositions on Altruism. *Economic Journal* 85: 355-60.
- Creedy, J. 1980. Some Recent Interpretations of *Mathematical Psychics*. *History of Political Economy* 12(2): 267-76.
- 1981. F.Y. Edgeworth, 1845-1926. In *Pioneers of Modern Economics in Britain*, edited by D. P. O'Brien and J.R. Presley. London: Macmillan. 「F.Y. エッジワース」『近代経済学の開拓者』所収, 井上琢智・上宮正一郎・八木紀一郎他訳, 昭和堂, 1986.
- 1986. *Edgeworth and the Development of Neoclassical Economics*. Aldershot: Gregg Revivals, 1992.
- Dictionary of National Biography (D.N.B.)*. London: Oxford University Press.
- Edgeworth, F.Y. 1876. Mr. Matthew Arnold on Bishop Butler's Doctrine of Self-Love. *Mind* 1: 570-71.
- 1877. *New and Old Methods of Ethics or "Physical Ethics" and "Methods of Ethics."* Oxford: James Parker.
- 1879. The Hedonical Calculus. *Mind* 4: 394-408.
- 1881. *Mathematical Psychics: An Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*. New York: Kelley, 1967.
- 1897. The Pure Theory of Taxation. In *Papers relating to Political Economy*, 2: 63-125. London: Macmillan, 1925. Originally in *Economic Journal* 7: 46-70, 226-38, 550-71.
- 1925. Reminiscences. In *Memorials of Alfred Marshall*, edited by A.C. Pigou. New York: Kelley, 1966.
- Galton, F. 1879. *Hereditary Genius*. Honolulu: University Press of the Pacific, 2001.
- Jevons, W.S. 1881. *Mathematical Psychics: An Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*. By F.Y. Edgeworth, M.A., Barrister-at-Law. London: Kegan Paul, 1881. pp. viii, 150. *Mind* 6: 581-83.
- Keynes, J.M. 1933. *Essays in Biography*. In *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, 10. London: Macmillan, 1972. 大野忠男訳『ケインズ全集 第10巻 人物評伝』東洋経済新報社, 1980.
- Marshall, A. 1881. Review of F.Y. Edgeworth's *Mathematical Psychics: An Essay on the Application of Mathematics to the Moral Sciences*. In *Collected Works of Alfred Marshall*, 1. Bristol: Overstone Press, 1997.
- Newman, P. 2003. *F.Y. Edgeworth's Mathematical Psychics and Further Papers on Political Economy*. Oxford: Oxford University Press.
- Peart, J.S. and D.M. Levy 2005. From Cardinal to Ordinal Utility Theory: Darwin and Differential Capacity for Happiness. *The American Journal of Economics and Sociology* 64(3): 851-79.
- Schneewind, J.B. 1977. *Sidgwick's Ethics and Victorian Moral Philosophy*. Oxford: Oxford University Press. Paperback edition, 1986.
- Schumpeter, J.A. 1954. *History of Economic Analysis*. London: George Allen and Unwin. 東畑精一訳『経済分析の歴史』全7巻, 岩波書店, 1955-62.
- Sidgwick, H. 1877 a. *The Methods of Ethics*, 2nd edition. London: Macmillan.
- 1877 b. Mr. Barratt on "The Suppression of Egoism." *Mind* 2: 411-12.
- 1906. *The Methods of Ethics*, 7th edition. In *The Works of Henry Sidgwick* 2. Bristol: Thoemmes Press.
- The Oxford English Dictionary (O.E.D.)*. Oxford: Clarendon Press.
- 今田 恵, 1962. 『心理学史』岩波書店.
- 上宮智之, 2005. 「エッジワースの『ボックス・ダイアグラム』とその伝統的解釈—1970年代におけるボックス・ダイアグラム論争を中心に」『経

- 『経済学論究』58(4): 109-32.
- 奥野満里子, 1999. 『シジウィックと現代功利主義』勁草書房.
- 外林大作他編, 1981. 『誠信心理学辞典』誠信書房.
- 中野聡子, 1995. 「交換理論の展開」『経済学の正統と異端—クラシックからモダンへ』所収, 平井俊顕・野口旭編, 昭和堂: 第6章.
- 根岸 隆, 1985. 『経済学における古典と現代理論』有斐閣.
- 福岡正夫 1999. 「フランシス・イシドロ・エッジワース」『歴史のなかの経済学—一つの評伝集』所収, 創文社.
- ホメロス, 土井晩翠訳, 1995. 『イリアス』富山房.
- 松嶋敦茂, 1989. 「「極大満足説」と現実」『彦根論叢』257: 25-53.
- 2005. 『功利主義は生き残るのか—経済倫理学の構築に向けて』勁草書房.
- 行安茂編, 1992. 『H. シジウィック研究—現代正義論への道』以文社.